

但馬地方のクモ類について

山本 一 幸*

但馬地方は、今までその土地の持つ自然の豊かさをあまり知られていなかった。従来より研究者の手でいくらかの調査はなされてきたにもかかわらず、その記録は少なく、空白に近い状態のまま、開発の手により少しずつこの地方の自然は昔の姿を変えてきている。しかし、但馬の自然の豊かさはまだ新しい研究者の目の前に新発見をもたらしてくれるのだから、昔のままであったなら、さぞかしすばらしいところであらう。

クモ類の研究は、研究者も少なく未開拓の分野であったが、クモに興味を持つ人が増え、但馬地方も調査されるようになってきた。筆者もまた、その研究者のひとりであり、何ぶん知識の吸収が不十分であったため、あまり成果をあげていないが、現在、但馬西部のクモ相の究明に努めている。ここに掲げるのは、但馬に数多く生息するクモ類のほんの一部であるが、但馬地方のクモ相を知るうえで重要な種であると思われる。

1. キノボリトタテグモ

1976-X-5 浜坂町城山

個体数の少ないクモで、但馬地方ではトタテグモ類は本種しかみつからない。通常、トタテグモ類の大部分は地中に穴を掘り、その入口となる部分に糸で戸を作ることからこの名があるが、キノボリトタテグモの場合は、地中ではなく、木の幹の樹皮面に木の皮、コケなどで擬装してぶくろ状の住居を作る。この住居がみられる樹は、マツ、クヌギなど、樹皮の面が粗いものが多い。コロニーを作るらしい。

その他の産地：豊岡市神武山、妙楽寺。

2. ムレサラグモ

1978-VI-18 上山高原, 1978-VII-2 温泉町青下

但馬地方では最近発見されたクモで、外国の *Drapetisca socialis* と同じとされていたが、外雌器など形態が異なるため、同種ではないとの意見がある。ムレサラグモの名のとおり、クモ類では珍しく群れを作る(学名の *socialis*)

* 現住所 〒669-67 兵庫県美方郡浜坂町

は social = 社会性の意味がある) といわれていたが、近年の研究によると、外国産の *D. socialis* は群れを作らないと結論されたそうである。

生態的に、網の張り方に特徴がある。ブナ、トナなどの幹に付着したコケにはりついたようなシート状の網を作り、クモはその表面にいる。クモ自身の体色は緑色で複雑な模様をしており、保護色の意味があるらしい。春先の幼生の時期には幹に網を張らず、ブナの根元附近の凹みに水平な網を作る。

ムレサラクモは、ジヨロウクモなどのように一年一代性で、夏から秋にかけて成体になり、卵のうで冬を越すらしいが、まだその生活史については未知の部分が多い。樹の幹のコケと何らかの関係があるのではないかと思えるが、今後その生態を調査することで、明らかとなるであろう。雄について、亜成体は採集されているが、成体はまだである。また、このクモに寄生するハチがいるとのことである。

その他の産地：三川山、氷ノ山。

3. トゲクモ

1976-IX-2 浜坂町久斗山

この仲間には熱帯に多く、形態や色彩など特異なものが多い。日本では本種ともう一種、チブサトゲクモの2種類が生息する。トゲクモは意外に北方まで進出しており、青森県でも記録がある。

腹部は硬いキチン質でおおわれ、3対の棘が周囲に突出しており、鳥などから身を守るのではないと思われる。大きな円網を夕方から朝にかけて張る。

4. ムツトゲイセキグモ

1976-VIII-1 浜坂町久斗山

その形態はトリノフンダマシ属を思わせるが、胸部背面に縦2本、横系4本からなる6本の棘があり、ムツトゲイセキグモの名はこれからきたものである。全国的に採集例は少なく、10頭に満たない。そのため、生態や雄の発見など、不明な部分が多いクモである。成体の出現は夏期と思われるが、8月1日に採集した個体は亜成体であった。

他の採集地は、三重県、神奈川県、愛媛県など比較的温暖な地域で、熱帯系のクモに区分されている。

5. カトウツケオグモ

1976-IX-2 浜坂町久斗山

腹部に多数の突起があり、いかつい形をしている。葉上で脚を縮めたかっこうは、鳥の糞に似ているといわれる。

本種も珍しいクモで、採集例は少なく、日本では10数頭の記録があるにすぎない。兵庫県では、昭和49年9月15日、三尾山で柏原高校生物部員によって採集された記録がある。また山陰地方では、1963年に有田立身氏による記録があり、但馬地方においても不思議ではない。

6. シボクモモドキ

1978-V-28 上山高原

リターなどに普通にいるシボクモに似るが、眼の両側にや頭胸部にある2条の縦斑などで区別できる。

北方性のクモで、北海道での採集例は多いが、本州での採集例は、青森県冷木峠、栃木県那須高原、長野県八ヶ岳、岡山県蒜山の4ヶ所ではなかった。しかし、1975年6月1日、本庄四郎氏によって扇ノ山山麓の畑ヶ平高原より雌の成体が採集された。また、1978年5月28日、筆者は同じく扇ノ山山麓の上山高原にて、背の白いササの根元附近の枯れ葉の下などに、本種が多数生息することを確認し、雄成体、雌成体を各1頭ずつ採集した。

これらの記録により、新たに但馬地方もその産地に加わった。いずれ、調査が進むにつれ、前記の4、5の珍種共々、その産地や生態が明らかとなっていくことであろう。

後記

但馬地方のクモ類について、今までの採集記録などを見ると、どうも南方性のクモは海岸地帯に、北方性のクモは山岳地帯に分布しているようで、このことは但馬地方の気候の特徴からうなずけることと思える。しかし、調査はまだ不十分なものであり、今後の調査でよりはっきりしたことがわかるであろう。

しかし、山林の伐採や観光開発などのため、すばらしい自然が未調査のまま破壊されていくのはひどく残念である。無意味な開発は絶対やめなければならぬ。そのことが但馬のすばらしさを残すことでもある。自動車で山に登ることが、本当に自然に親しむことなのか。雑木林を伐採して針葉樹林にしてしまうことが、本当に緑を大切にする事なのか。もっと根本から観光開発や植林の意義を考えてもらいたい。病気になってはじめて健康のありがたさがわかるように、すばらしい自然の中に浸りきっていて、自然とはどういうものなのかを見失ってはいないだろうか。我々自身を考えなければならぬことがあ

と思う。

クモとはかけ離れてしまったが、クモや他の生物を研究する上で、大切なことは、やはり豊かな但馬の自然がそこにあるこそ、但馬の生物を知ることができるということだと思う。もっと但馬のすばらしさを見直していきたい。

参考文献

- 福井義昭. 1977. カトウツケオグモ (系図説明). NATURA, 34.
 本庄四郎. 1972. 但馬のクモの動物地理分布. 但馬の生物, 20.
 ———. 1976. 扇ノ山の真正クモ類相について. 兵庫県自然保護協会但馬支部研究紀要, 2(1).
 新海栄一. 1978. 那須高原のクモ. 採集と飼育, 40(9).
 八木沼建夫. 1974. よみもの動物記・クモの話. 北隆館.
 ———. 1974. 原色蜘蛛類大図鑑 (増補改訂). 保育社.
 山本一幸. 1976. 浜坂町の真正蜘蛛類について. Aculeatus, 10.

